

クローズアップ

# NGO・NPO

国際民間援護協議会

## メコン基金

～輝く瞳に魅せられて～

Close Up

NGO・NPO

### 会の設立経緯と活動内容について

基金の始まりは、タイ国ノンカイ県の学校訪問で中学校に通学する学生が少ないとの話を聞いた時である。タイ国の若い国会議員（現地選出）が、バンコク市に滞在していた私に現地を見てもらいたいと同行してくれた。現地で基金をつくる約束と五〇人分の奨学金を提供する約束をして日本に戻った。NGOの何たるかも知らない素人の私を基金創設にかき立てたものは、当時タイ国でのNGOの活動で現地訪問したとき、戦争で被害を与えた日本の償いといわれたことが心に残った。日本人であることも話してはいけないといわれた。戦争を知らない私が、アジアの人々と仲良くしたい、戦争の歴史を乗り越えた交流をしたいとの気持ちから基金の創設を決めたわけである。

当時、村には電気もなく、夜には漆黒の闇があり、ランタン、ろうそくが唯一の明かりだった。そんな中私が村に泊まると、村に二、三台しかない小型耕運機で発電して、家に蛍光灯を一つ灯して歓迎してくれた。優しい気持ちに触れて、何としても長い期間この地の人々と交流したいと思った。電気もなく貧しい村では、親類だけではなく、村全体が親類のような付き合いがあった。

基金の発足は、仲間や報道関係のお手伝いもあり、順調に進んだ。翌年には郵政省（現郵政公社）ボランティア貯金も始まり、配分金を受けることができた。北海道では初の配分

として、報道でも大きく取り上げられ、メコン基金の名が全国に知れ渡った。五〇人の奨学金提供は、会員が増えて三〇〇人までになった。

ラオス国援助は、三年後（一九九四年）より開始した。最初は中古衣料を届けることから始まった。約四〇tの衣料品を届けた。ラオス国空軍の輸送機を借り上げたり、車で山岳民族の村に届けたりした。私自身が同行したので、現地でもとても喜んでいただけ。その折に村の小学校の粗末さと教材のなさに驚いた。弟や妹を背負って勉強している児童もいた。教本もなく素足で机に向かう児童が大半だった。

しかし、学校に通える子どもは半分程度で、学校に通えない子どもも多さにも驚き、何とか勉強のできる環境をと考え、小学校建設に取り組んだ。郵政省（現郵政公社）ボランティア貯金配分金、個人寄附、団体寄附等の支援を受け、一三校を建設した。村に多いマラリヤの薬を届けたりもした。当時、学校には便所や飲み水の施設もなかった。現在でも、山の村に行くと思所もなく、川で身体を洗い、川水を飲んでいる地域も多くある。建設した学校には、便所や飲み水の井戸も完備して、衛生面の支援もしている。井戸は、学校だけではなく村にも整備して、衛生的な飲み水を提供している。身体を洗ったり家に水を運んだりして、井戸はいつも大人や子どもでにぎわっている。

現在は、一部の中学校に奨学金の提供もし

**メコン基金**

〒093-0423 北海道常呂郡佐呂間町字浜佐呂間418-1

TEL 01587-6-2425 FAX 01587-6-2155

ている。教育から生き方を考えてもらいたい  
 と思つている。現地交流会として、会員や学  
 生によるホームステイも年二回〜三回実施し  
 ている。奨学金を提供している学生の家に泊  
 まり、現地の生活体験と交流を目的としてい  
 る。壁のない家に泊まり、水で身体を洗い、  
 現地の食事を食べる。現地ではもち米が主食  
 である。もち米は都会では食べない。日本人  
 はもち米を喜んで食べるので、村人には歓迎



↑ホームステイ先の奨学金宅へ向かう（タイ国）

て、学校で教育している。日本語で話かける  
 学生も多くいて、交流の際にはとても喜ばれ  
 ている。大学のセミナーでホームステイも始  
 まった。現地での生活体験が日本の学生には  
 喜ばれている。別れる日に抱き合つて泣いて  
 いる姿を見ると、とてもうれしくなる。

**自治体との関係**

現在は、本部のある佐呂間町で、中高生の

される。指差し会話の本で話  
 をするが、話は進む。  
 今年はラオスに中学校の建  
 設をしている。近くに、遠い  
 村の学生を泊める学生寮もつ  
 くる予定である。中学校は、  
 小学校一〇校に対して一校程  
 度で、田舎の学生は通学に苦  
 慮している。雨期には通学で  
 きない学生もたくさんいる。  
 そのような環境の学生が、自  
 炊しながら通学できるよつに  
 と考へている。

訪問した際には、泊まり交  
 流や日本語指導もしていく。  
 タイ国の中学校では、第二外  
 国語に日本語を勉強する学生  
 がたくさんいる。会員が現地  
 での日本語教育に熱心で、日  
 本語教育NGOをつくり、指  
 導している。数人のボランティア  
 教員を日本から派遣し

交流会参加者に対して旅費の六〇％を支援し  
 てもらつている。生涯教育の一貫として夏休  
 みに実施している。事務局も職員にお手伝い  
 していただいている。北海道からは、NGO  
 支援として多くの情報や交流会等を実施して  
 いただいております。現地に根差したNGOとし  
 て高い評価をいただいている。

これからも自治体との関係を保ち、共同支  
 援等ができればと思つている。全く素人のN  
 GOが、一〇年以上にわたり支持していただ  
 けたことには、感謝の気持ちでいっぱいである。



↑コーコン中学校の交流（タイ国）

クローズアップ

# NGO・NPO

特定非営利活動法人

## ふじみの国際交流センター ～在住外国人と仲良く共生できる 地域社会を目指して～

Close Up

NGO・NPO

### 設立までの経緯

ふじみの国際交流センターのそもそもの始まりは、埼玉県入間郡大井町に住む一人の主婦が思いついた日本語教室である。「自分の子どもから、外国に行ったときにこの国の人もみんな親切にしてくれたという話を聞いて、在住外国人に対して、地域の先住者として何ができるかと考えたとき、日本語教室を思いつきました」とその主婦、石井ナナエ理事長は話す。

その日本語教室は、一九九一年三月に大井町の中央公民館でスタートしたが、この活動を通じて、在住外国人たちが抱えるさまざまな悩みや問題等を目の当たりにした同理事長は、外国人と日本人が交流する場所や、外国人が自由集えて、いざというときの駆け込み寺となる場所の必要性を認識するようになった。

こうして、一九九七年から交流拠点設立の準備が進められ、一九九八年四月に任意団体の「ふじみの国際交流センター」（以下、センター）が誕生した。二〇〇〇年一月にはNPO法人となり、富士見市、上福岡市、二芳町、大井町（以下、二市二町）を中心に、「在住外国人との交流、協力、支援に関する事業を行い、外国人との共生に寄与すること」を目的として活動している。

### 活動事例

活動の大きな柱の一つとなっているのが、

多言語情報誌「インフォ

メーションふじみの」の発行である。毎月発行されているこの情報誌は、既に七〇号を超え、二

市二町の役所、公民館、図書館の窓口等で無償配布されている。現在七カ国語で、ごみの出し方や乳幼児健診など、生活に必要な情報の発信が行われているが、翻訳作業は、すべて外国人のボランティアによるものである。二〇〇一年度には、「日本語が分からない外国人にとつての母国語による情報誌の重要性を理解してもらい、より多くの地域で多言語による情報発信が行われるようになってほしい」との期待を込めて、埼玉県西部の二〇市町へ広域配布を実施した。

このほか生活相談窓口を開設し、在住外国人のさまざまな悩みや問題に対応しているほか、二市二町で行われる文化祭、産業祭、福祉祭などの各種イベントにも積極的に参加・協力し、国際交流の推進や国際理解を深める活動を行っている。

### 行政との連携

センターでは、二市二町から外国人生活相談窓口の開設を委託されているほか、上福岡



↑多言語情報誌「インフォメーションふじみの」現在7カ国語で情報発信している。

## ふじみの国際交流センター

〒354-0033 埼玉県富士見市羽沢3-22-22 TEL 049-275-0370 FAX 049-275-0371

E-mail:ficec@m09.alpha-net.ne.jp URL:http://www.alpha-net.ne.jp/users2/ficec/



↑国際理解教室。スリランカの話をするカンディーさん

市が発行する六カ国語による生活情報誌「ロー上福岡」の発行業務、富士見市の多言語生活ハンドブック「くらしのガイドブック」の作成、大井町の国際ミニ交流会の企画・運営などの業務も受託しており、行政と連携した活動も多い。行政とイコールパートナーとして協働できる体制が望ましいと考えているセンターでは、そのための人材の確保、育成にも取り組んでいる。

また、近年、二市二町を中心とする小・中学校から、国際理解教室への講師派遣の依頼が増加している。センターでは、学校からの依頼に基づいて外国人の講師を派遣しており、二〇〇二年度は、一七の小・中学校で二九回の国際理解教室を実施した。「国際理解教室が始まったころは、講師が韓国人の場合、子どもたちはキムチのことがかり質問していました。最近はその国のことを事前に調べたり、授業で学んだことをほかの勉強に生かせるようになつてきました。授業中の子どもたちの反応はとても良くて、お礼の手紙もたくさん届き

ます」と石井理事長は話している。

## 教育の充実へ向けて

二市二町に住む外国人は、日本人男性の配偶者、留学生、労働者などで、フィリピン、インドネシアなどの東南アジア、中国、韓国、ブラジルなどからの移住者(日系二世、三世)が多い。近年、日本語が分からないまま日本に連れて来られる子どもが増えており、その子どもたちが、学校の授業についていけないという問題が発生している。最近では、学校によっては「取り出し授業」として補習授業を実施するようになったが、週に一回の授業では十分ではないことから、センターのボランティアが自主的に追加の授業を実施している。

また、センターでは、外国人向けの分かりやすい日本語教材がないことに気が付いたことから、日本語を教えた経験のない素人でも教えられる独自の日本語教材を作製するなど、教育の充実に向けた活動を積極的に展開している。

「学びがないと、犯罪等が増加する。学びを保証することは大切」と話す同理事長は、イギリスのESL制度(注)のような日本語を学ぶためのフリースクールの必要性を訴えている。

## 今後の活動と課題

センターでは、活動資金の充実を図ることが大きな課題となっている。現在、センターの主な収入源は、会費、寄附、バザー等の売

上げであるが、センターを通じての講演や翻訳などによる収入も、自発的にセンターに寄附されており、運営に携わるスタッフも無給であるなど、スタッフの負担は少なくない。資金的な余裕があれば、スタッフの増員も可能となり、より充実した活動ができるのではと考えるものの、十分な活動資金を確保するのは厳しいのが現状である。

また、センターには、シエルター(一時避難所)が併設されている。これは、諸事情により泊まる場所がない、あるいは家に帰れないといった外国人が一時的に利用するためのものであるが、シエルターを併設することは、センターにとって負担が少なくない。センターでは、公設民営による国際交流センターの設置を希望しており、今年四月に、七〇〇名の署名を集めて、埼玉県及び二市二町へ公設民営の国際交流センターの設置について陳情を行うなど、その必要性を訴えている。

このような課題を抱えながらも、同理事長は「センターでの活動は、想像したことを創造できるところが面白い。また、外国人が元気になるべくのが目に見えて分かり、それとともに、自分自身も成長させてもらっている」とあくまで前向きだ。今後、ますます地域における役割が大きくなり、活動に対する期待が膨らんでいくことと思われる。在住外国人と仲良く共生できる地域社会の実現に向けて、スタッフたちの熱意の下でのセンターのさらなる飛躍と、一層の地域社会への貢献を期待したい。